

第16回JYPO 臨床疫学 ワークショップ

JYPOの活動の中で、CADPに次ぐ歴史を誇る臨床疫学ワークショップですが、今回はオンライン開催となり、一層参加しやすくなりました！

今回は「**初学者が自分で臨床研究を立ち上げ、推進していくイメージをつかむことができる**」ことを目標に**豪華な講師陣**による実践的な内容を提供します！



日時・開催方法

日時：
9月21日(月・祝)
10時開始 17時終了
(途中参加、退場可)
○Web懇親会 18:00～
開催方法：
オンライン(ZOOM使用)

対象

精神科の臨床研究に興味のある方
(精神科医でない方・学生も大歓迎)

費用

JYPO会員：2,000円
JYPO非会員：3,500円

※プログラム終了後の1週間、参加申込者限定で、見逃し配信を行う予定です。

破格です！

講師

- 福原 俊一 先生** 名著「臨床研究の道標」著者
(京都大学/福島県立医科大/Johns Hopkins大学)
- 小川 雄右 先生** (京都大学)

プログラム

- 10:00-10:30 開会挨拶など
- 10:30-12:00 workshop①「CQをRQに構造化する」(小川雄右先生)
- 12:00-13:30 休憩
- 13:30-14:30 講演「デザインが研究の質を決定する」(福原俊一先生)
- 14:30-14:40 休憩
- 14:40-16:20 workshop②「臨床と研究のための文献検索」(小川雄右先生)
- 16:20-16:40 質疑応答
- 16:40-17:00 アンケート記入、解散
- 18:00～ Web懇親会

裏面に講師詳細と講演抄録あり👉

参加をご希望の方は、メールにてお申し込みください。

●記入事項：

- ①氏名
- ②所属
- ③医師歴(医師○年目)
- ④懇親会への参加/不参加
- ⑤途中出場の場合その旨
- ⑥JYPO会員かどうか

※参加申し込み後、お支払いについてメールにてご連絡します。

※お支払い完了後、zoom参加URL含め参加方法をお送りいたします。

●お申し込み/お問い合わせ先：

川竹 絢子(京都大学) ayakokawatake@gmail.com
佐竹 祐人(大阪大学) surviver.blue@gmail.com

運営：認定特定非営利法人 日本若手精神科医の会
/ 運営委員長：佐竹祐人

福原 俊一先生



【略歴】

北海道大学医学部卒、米国カリフォルニア大学（UCSF）で総合内科研修後、循環器・総合内科診療に従事。Harvard大学フェロー、東京大学講師を経て現職に（2年間東京大学教授併任）。世界医学サミット第7回本会議（ベルリン）会長。現在、京都大学特任教授、Johns Hopkins大学客員教授、福島県立医科大学 副学長。米国内科学会(ACP) 卓越会員(MACP)、日本臨床疫学会 代表理事。

<ご講演テーマ>

デザインが研究の質を決定する

日本の研究発信力が低迷している。特に臨床研究で著しい（トップジャーナルの論文数で、世界における日本のシェアは基礎研究で約8%、臨床研究で約3%。精神科領域は1.5%）。我が国の医学アカデミアは岐路に立たされていると言えよう。日本の臨床研究低迷の原因として、臨床医の統計解析や英語の能力不足の問題が指摘されるが、それ程大きくなく、むしろ「研究デザイン学」が体系的に教えられなかったことにこそ本質的な問題があると考え（出典：福原著 臨床研究の道標 第二版 東京 2017年）。

もう一つ強調したいのは、「臨床研究＝臨床試験ではない」ということだ。むしろ観察研究にこそ、大きな可能性が秘められている。特に、昨今、診療情報やレセプト情報などの所謂ビッグデータが研究に活用可能となり、「データベース研究」として活況を呈している。データベースといっても様々な種類があり、それぞれ長所と欠点をもっているため、これを理解することは重要である。筆者は、患者アウトカムや詳細データの収集が可能なレジストリ研究に長く関わってきたので紹介する。中でも約20年間にわたり、12カ国、2万人を超える透析患者を対象とした観察研究であるDOPPS（Dialysis Outcomes and Practice Patterns Study）のSteering Committeeの一人として関わってきた。DOPPSからトップジャーナルに多数の論文を発信しエビデンスに貢献しただけでなく、世界の透析医療の質を確実に改善した。また多くの優れた若手研究者を輩出し、研究者人材育成に貢献した。またDOPPSでは、4つの主要アウトカム指標の一つにPRO（Patient Reported Outcomes）を含めた。20年前にPROに着目したその先見性に敬意を表したい。今回も時間が許せばPROにも触れたい（出典：DOPPS 透析臨床にもたらしたインパクト 東京 2013年）。臨床研究の推進は、世界ランキングの上昇やエビデンスを生み出すためだけに有用なのではない。若手臨床医が臨床研究に取り組むことにより、診療自体も活性化し、医療の質をも向上する可能性が高い。わが国の臨床研究を発展させる真の意義は、まさにそこにある。今こそ医学アカデミアが中心となって、意味のある臨床研究を推進すべきで、そのためには、若手研究者人材育成とデータベース研究を同時に進行させる必要がある。

小川 雄右先生



【略歴】

2004年 熊本大学医学部卒業、熊本赤十字病院 初期臨床研修医、2006年 熊本県立こころの医療センター、2007年 熊本大学医学部附属病院神経精神科、2008年 熊本大学大学院医学教育部 博士課程、2012年 京都大学大学院医学研究科 臨床研究者養成コース 専門職学位過程、2013年 京都大学大学院 医学研究科 社会健康医学系専攻 健康増進・行動学分野 助教、2018年 京都大学大学院 医学研究科 社会健康医学系専攻 医療疫学分野 特定講師（兼任 京都大学医学部附属病院 総合臨床教育・研修センター）

ワークショップ①：臨床疑問を研究疑問に構造化してみよう

ワークショップ②：臨床と研究のための文献検索の行い方

臨床研究を行うためには、まず、日々の臨床において遭遇する疑問であるClinical Question（臨床的疑問）を、Research Question（研究疑問）としてPECO（あるいはPICO）の形に構造化する必要がある。Research Questionは研究の質に大きく影響するため、疑問の構造化は臨床研究において非常に重要なステップである。

次に、研究には新規性が必要である。新規性があるかどうかを判断するためには、先行研究の系統的な検索を行い、これまでに何がわかっていて何がわかっていないのかを明らかにする必要がある。研究の検索はEBMの実践においても必要なスキルである。今回のワークショップでは、臨床研究やEBMを行うために必要な最初の2つのステップである、疑問の構造化と先行研究の検索についてのレクチャー、グループワーク、ハンズオンを行う。